SELF-HELP

BY

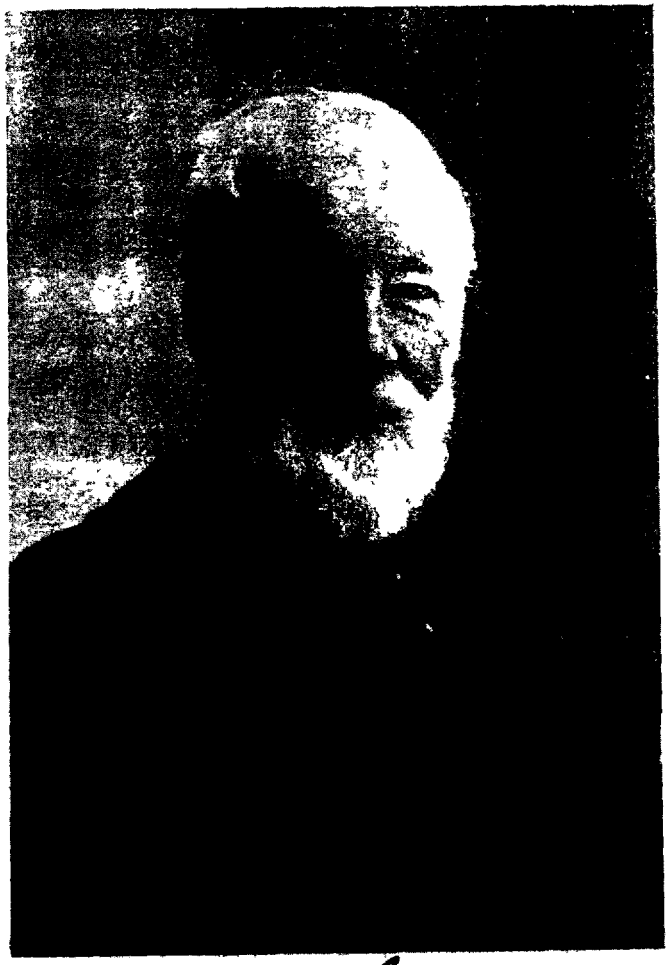
SAMUEL SMILES

自助論

博士 サミュエル・スマイルス 原著

畔上賢造譯述

東京 內外出版協會



序

スマイルス氏の四大著書の中、『自助論』は、最も有名なるもの、實に世界不朽の大著にして、其價値は普く人の知る所なり。我國既に中村正直博士の譯あり『西國立志編』と名けて當年の讀書界を風靡し、今も猶坊間にありて之を讀むもの絶えず、以て日本文學の寶庫の一座位を占めたり。敬宇先生の譯文、謹嚴にして的確莊重にして整齊、寔に是れ堂々たる大家の筆致、世の俗流を拔く幾千仞の上にあり。但先生の文今に於て之を讀む稍漢文調に偏して、現代青年の甚に了解に苦む所、而のみに金玉の文字も往々にして興味の索然たるものあり且つ先生の譯文は、原文の意を略したる所甚だ多きを以て、吾人は甚だ之を遺憾と

例言

一、スマイルス先生の『自助論』を前、中、後の三編に分ちて飜譯出版す。第一章より第四章までを前編として茲に譯出したり。

二、余は偏に原文の意味に忠實ならんことを努めたり。歐文と國文とは、其文脈甚だ異なるが故に、之を直譯しても少しも意味をなさず、只原文の意味を辿りて其儘之を日本文となすか、又は原文大體の精神を傳へ得ば足れりとし、原意に拘泥せずして自由に筆を動かすかの二途あるのみ。而して余は前者を取れり、是れかゝる飜譯風が、最も能く且つ最も忠實に原著者の精神を傳へ得べしと思ひたればなり。

三、かゝる飜譯風の當然なる結果として、余の譯文の思想發表法は、日本文の思想發表法と異なる所あるべく、從つて普通の日本文よりは稍〻讀み惡きものあらん。是れ何れの飜譯文にも免れ難き弊害として讀者の寛恕を乞はんのみ。

し、別に新に『自助論』を今日の時文に飜譯して閲讀に易からしめ、且つ先生の略せられたる所を補はんとす。スマイルス先生金玉の文字は、故宇先生金玉の文字に譯されしと雖も、余は徒らに之を泥土と化するのみなり。然りと雖も、余一意原文の意味に忠實ならんことを勉めしが故に、文は即ち泥土なりと雖も、想は即ちスマイルス先生其儘を傳へ得て大過なしと信ず。余が拙惡の文に依りても、若しスマイルス先生が大思想の俤を捉ふることを得、聊か世道人心に補益する所あらば、余の願茲に盡きたりと謂ふべきなり。

明治二十九年一月下旬　　坪上賢造識

四、然れども、余は極めて眞面目に極めて忠實に飜譯のことに當らんと努めたり。其結果は所期に反する所多々なりと雖も、而も余は余の力の最上を盡くしたることを告白し得るを光榮とするものなり。

五、圈點は、勿論原書になし、是れ總て余の隨意に施す所なり。

六、佛蘭西の發音法を知らざる余は、佛の固有名詞は概ね『西國立志編』の發音に從へり。佛のみならず英獨以外のは皆然り。凡て英獨以外の發音には、誤謬多からんと信ず、偏に讀者の寛恕を乞ふ。

七、敬宇先生の『西國立志編』は種々の點より余の飜譯を助けたり。

八、余の飜譯せる原書は、訂正版の方なり。

原序

こは既に國内及び海外に於て著しき歡迎を受けたる書の改訂版なり。此書は、亞米利加に於て種々の形に飜刻せられ、飜譯は既に和蘭及び佛蘭西に現はれ、獨逸及び丁抹に於ても亦將に現はれんとす。此書、逸話實例を掲げて、人の生涯及び性格を示すこと多く、又人は多少に拘はらず、他人の勤勞、艱難、奮鬪及び成功に興味を感ずるものなるを以て、此書は諸國に於て疑ひもなく讀者を引きつけたり。此書大部は余の創始に成る、重もに多年の間手帳に書留めし中より蒐集し、青年に對しての讀物に供せんとし、出版に關しては一の意見を有せざりき。されば本書の斷片的なることは、著者誰人よりも能く之を知れり。此改

版に於て余は不用の事柄を省き、種々の新實例を增したり。是等の實例は、多分一般の趣味を牽くことならん。

書の題名は、或る點に於て甚だ不幸なりき、そは單に『自助』なる名に依りて判斷じて、此書を我欲を賞讃するものとなしたる人々あればなり。(されども名を改めんには今や晩きに過ぐ)かくの如きは誠に實際の正反對なり。一、少くとも著者の然らんと期せし所と正反對なり。此書の主なる目的は、青年を鼓舞して正しき事業に勤勉せしめ、其ためには勞力をも苦痛をも避けず、克己自制を勉め、他人の幇助庇護に依らずして、專ら自己の努力に賴らしむるにあり。然りと雖も、文學者、科學者、美術家、發明家、教育家、慈善家、傳道師及び殉教者等の例に依りて見るときは、

自助と云ふ職分は、其最高の意義に於ては、隣人を助くることをも含むものなることを知るべし。

尙ほ本書を批難するものありて曰く、自助に依りて成功せし人々に注意すること過大にして、失敗者に注意すること少に過ぎたりと。問ふものあり、曰く何故失敗は成功と等しく之を傳せざるかと。失敗を傳せざる理は、單なる失敗の記事は、恐らくは讀者を沮喪せしめ、又無益なるべしと思ひたればなり。此他別にこれぞと云ふ理由あるにあらず。さはれ、本書に於て失敗に關して一事の示さるゝあり、即ち失敗は、眞の勞作者には最良の試驗にして、彼を刺戟して新しき努力を起さしめ、彼の最上の力を喚起し、ます〳〵自修と自制とに進ましめ、且つ智識と智慧と

を助長せしむとのことなり。かく見るときは、失敗も之を堅忍にて打ち破りたるときは、興味と教訓とに富むものなり。而して此事は、吾人が數多の實例を擧げて表明せんと勉めたる所なり。

善事を企てゝ失敗したるは、人生の終りに於て之が慰藉を求むるは可ならんも、人生の初に於て青年の前に提出すべき目的にはあらざるべし。げにや「無爲にして終ること」は、萬事の中、最も學ぶに易きなり。そは教養をも努力をも克己をも勤勉をも忍耐をも堅忍をも、又判斷力をも要せざるなり。しかのみならず讀者は、戰爭に負けたる將軍、其機關の破れたる技師、拙惡の家のみ造る建築家、粗畫のみ描く畫工、器械の發明に失敗せし設計家、破產を免る

ゝ能はざりし商人の事を知らんとは欲せざるなり。最優の人、最優の主義を以てして失敗することあるは事實なり。然れども、かゝる人、決して殊更に失敗せんとてしたるにあらず、又其失敗を手柄とは思はざるなり。否、彼等は實に成功せんと力めたるものにして、其失敗を以て不幸となすものなり。然りと雖も、善き志を以てして失敗したるは貴ぶべし、惡き志を以てして成功したるは啻不名譽たるのみ。如何なる場合にても、吾人の貴ぶべきは、事の成敗よりも、寧ろ善き目的を逐ひ行く志望、努力、忍耐、勇氣、精勵等なり。

吾人は必ずしも成功を要せじ、
たゞより多くなさんのみ——得んと努めんのみ。

本書の目的を簡單に言へば、左掲の如き陳腐にして而も健全なる教訓を再び教へんためなりし。――是等の教訓は、幾度薦むるも足らぬものならん。『青年は快樂のために働くべし。』『信用するに足る程のことは、精勵勤勉に依らずしては成就する能はず。』『學生は困難の爲めに沮喪する勿れ、堅忍耐久を以て之に勝つべし。』『何よりも第一に品性の向上を圖るべきなり。之なくしては才能も價なく、世の成功も無意味なり。』等の教訓是れなり。

自助論目次

第一章　自助――國民及び個人

自助の精神――社會と人――政府は國民個人の反映なり――帝王主義と自助主義――ウキリアム・ダーガン獨立を論ず――極々なる階級の忍耐勞力者――自助は英人氣質の特徴なり――實際教育に於ける實例の力事業の力――傳記の價値――偉人は特別一定の階級より出づ――有名なる人貧賤より出つ――ンエクスピーア――幾多卓越の人卑賤より出づ――卓越せる天文學者――牧師の子にして卓越せる者――辯護士の子にして卓越せるもの――卑賤より起りし高名の外國人――化學者ヴアウケエリン――佛國に於ける兵卒の陞進――堅忍なる專心と精力との實例――ジョセフ・ブラザーン――フォックス――リンドセー――ウキリアム・ンヤックソン――リチャード・コブデン――勤勉は有用卓越の材となるに缺くべからず――富人階級總て懶惰者なるにあらず――其實例――軍人――哲學者――科學者――政治家、文學者――サー・ロバート・ピール――ブルーハム卿――リツーン――ザスレーリー――ウオルズウオルス自己依賴を論ず――ド・ーークヴキール、其勤勉及び他人の幫助を必要とせしこと――人を最も善く助くるものは其人自身ならざるべからず　一頁――四一頁

第二章　工藝の大家――發明家及び創造家

英國人民の勤勉——勞作は最良の教育者なり——ヒュー・ミラー——貧窮困苦は打ち破り難き困難にあらず——發明家としての勞作者——蒸氣機關の發明——ジェームス・ワット、其勤勉と物事に注意する習慣——マッシュー・ボールトン——蒸氣機關の應用——綿布製造業——早き發明家——ボールとハイス——アークライト、其早年——理髮師、發明家、製造業者——彼の勢力及び人格——南ランカシエアーのピール家——ピール家の創始者——綿布印刷者なる最初のサー・ロバート・ピール——貴婦人ピール——靴下編織器械の發明者牧師ウヰリアム・リー——困苦の中に海外に客死す——ジエームス・リー——ノッティンゲハムのレース製造業者——ポピンホット器械の發明者ジョン、ヒースコート——彼の早年、彼の機巧と耐久の堅忍——其器械の發明——リンドハースト廚の逸話——レース業の進歩——ヒースコートの器械ラディッツの破壞する所となる——ヒースコーの性格——ジャックワード、其發明と冒險——ヴアカンソン、其機械上の天才、其絹布製造の改良——ジャックワード、ヴアカンソンの器械を改良す——ジャックワードの機織器械採用せらる——織物原料梳治器械の發明者ジョシュア・ヘールマン——發明の歴史——其價値　四二頁——一〇六頁

第三章　三大陶工——バーレセ、ベートゲル、ウェッヂウッド

代古の陶器製造——エトラスカン人の陶器——フロレンスの彫刻家ラガ・デラ・ロビア即ち泐藥を塗る術の再發見者——ベルナルド・バーレセ、其生涯と勤勞との小記——伊太利製のカップを見て心燃ゆ——泐藥の秘密を探究す——無益なる勞苦を以て數

年試驗に從事す——彼及び家族の辛苦——不屈の堅忍、竈を燃せんため家具を燃やし遂に成功す——再び赤貧となる——死刑を宣告せられ又宥さる——彼の著作——パスチールにて死す——ヨハン・フリードリッヒ・ベーターゲル・伯林の「ゴールド・クック」——煉金術に於ける彼の惡戯、及び次の困苦——サキソニーに逃る——ドレスデンに於ける彼の滯留——赤色白色の磁器を造ることを發明す——製造はサキソニー政府に採用せらる——ベーターゲル入獄人として奴隷として取扱はる——其不幸なる終焉——セーヴルの磁器製造——英國の陶工ジョシア・ウエッヂウッド——英國土器製造の昔の有樣——ウエッヂウッドの不屈の勤勉、熱練及び堅忍——彼の成功——バーベルニー壺——ウエッヂウッドは國民の恩人なり——工藝の英雄　一〇七頁——一四九頁

第四章　專心と堅忍

偉大なる結果が單純なる方法にて得らる——幸運は勤勉の人に臨む——天才とは忍耐のことなり——ニウトンとケプレル——卓絶者の勤勉——反復の努力は力を生ず——サー・ロバート・ピール記憶力を養成せし話——熱練は實行に依りて來る——忍耐の必要——快活——ンドニー・スミス——博士フック——希望は人格の重要なる要素——傳道師カレイ——博士ヤングの話——鳥類學者オージュボンの話——カーライル氏と其「佛國革命」の原稿の話——ワットとスティブンソンの堅忍——ニネヴエ大理石發見に於けるロウリンソンとレーヤードの堅忍——研學者としてのコムト・ド・ヒュッフオン——彼の不斷不弛の勤勞——サー・ウオルター・スコットの堅忍——ジョン・ブリットン——ラウドン——サミュエ

ル・ドリュリ――ジョセフ・ヒューム　一五〇頁――一八八頁

第五章　幇助及び機會――科學の研究

大事は偶然の出來事に依りて得る能はず――ニュートンの發見――博士ヤング――精勵して觀察する習慣――ガリレオ――ブラウン、ワット、ブルーネルの發明偶然の事より思ひつかる――小事の論――アポロニウス・ベルゲーカスと常用曲線――フランクリン及びガルヴァニ――蒸氣力の發見――機會を捕へ又造ること――大勞作者簡單粗末なる器具を用ふ――リー及びストーンの修學の機會――サー・チャーター・スコット――博士デリースレー――サー・ハンフリー・デーヴィー――フアラデー――デーヴィーとコレリッヂ――クキアー――ダルトンの勤勉――時間を善用する例――ダゲッソーとベンザム――メランヒーンとバックスター――觀察せし所を筆記する事――筆錄をなせし人々――博士バイ・スミス――ジョン・ハンター、其小事を堅忍研究せしこと――彼の大勤勞――佛の外科醫アムブロース・パレー――ハーゼー――ジェンナー――サー・チャーレス・ベル――博士マーンヤル・ホール――サー・キリアム・ハーンエル――地質學者キリアム・スミス、其發見、其地質の地圖――ヒュー・ミラー、其觀察力――地質學者ジョン・ブラウン及びロバート・ブイング――サー・ロデリック・マーチソン、其勤勉と成功　一八九頁――二四四頁

第六章　藝術の勞作者

サー・ジョシュア・レイノルヅ、藝術に於ける勤勉の力を論ず――卓絶せる藝術家貧賤より出つ――藝術の士金錢の慾に動かされて勉むるにあらず――ミケル・アンジェロ富を論ず――ミケル・アンジェロ及びチャアンの忍耐勤勞――エストが早年の成功却て不利益となる――リチャード・キルソンとダカレリー――サー・ジョシュア・レーノルヅ、ブレーク、バード、ゲーンスボロー、及びナーガルス、年少にして畫を好くす――ホーガルスは頭敏なる觀察者なり――バンクスとマルレ、ディー――クロー――ロレーンとターナー、其不撓なる勤勉――ベリアーとジャックス・カロート、其羅馬行――カローとギブソンの徒――鍛冶屋にして音樂家なるベンエヌト・セリニ、上達の志熾なり――セリニ、ヘルシウスの立像を作る――ニコラスバウンン、其學習勞作に勉めしこと――デウケスノイ――バウシンの名聲――アラインエッフエル、其艱難と成功――ジョン・フラックスマン、其天才と堅忍――其勇ましき妻――フラックスマン夫妻の羅馬行――フランシス・チャンレー、其勤勉と熱力――ダヂソド・キルキーとキリアム・エッティー、共に不屈の勞作者――藝術家の受くる辛苦――マーチン――ヒューゾン――スコット記念像の建設者、チョージ・ケムブ――ジョン・ギブソン、ロバート、ソーバーン、ノーエル・バーン――鍛冶屋にして美術家なるジェームス・シャープルス、其自叙傳――音樂家の勤勉――ハンデル、バイトウン、ベートーゼン――バーク、マイエル、ハール――博士アーン――獨學自修の作曲家キリアム・シャックソン　二四五頁――三二〇頁

第七章　勤勉と貴族

貴族習勉の人々より起る――貴家の衰頽、ボーハンス、モーチマース、及びブランタ

ゼネッツ——比較的近代の貴族——商人を以て創まりし貴族——リチャード・フォレー、釘製造人にしてフォレー貴爵家の建設者——ノルマンヒー家の建設者キリアム・フィップスの冒險的生涯、其沈沒せる財産の發見——ランスドーン貴爵家の建設者サー・キリアム・ペッティー——ベルバー貴爵家の建設者ジェデディア・スーラット——キリアム・ストラットとエドワード・ストラット——陸海軍人の貴族——法律家の建設せし貴爵家——テンターデン卿とカムベル卿——エルドン卿——其早年の辛苦と最後の成功——ラング・デール男爵——堅忍の報酬　三二一頁——三五五頁

第八章　精力と勇氣

精力はチュートン種族の特質なり——人格の力の基礎——目的の力——集中——勇敢なる勞作——ヒュー・ミラー及びフォーエル・バックストンの語——意志の力及び意志の自由——ラメネーの語——スワロウ——ナポレオンと「光榮」——ウエリントンの「職分」——動作の敏速——印度にて英人のあらはせし精力——ワーレン・ヘスチングス——サー・チャーレス・ナピアー、其印度飯士に對する冒險——印度に於ける叛亂——ローレンス家——ニコルソン——デルヒの包圍——大尉ホドソン——傳道の勤勞者——東洋に於けるフランシス・サギアーの傳道——ジョン・ウイリアムス——博士リヴィングストーン——ジョン・ハワード——ジョナス・ハンエー、其生涯——グランヴル・シャープの博愛的勤勞——英國に於ける奴隷の位置——シャープが努力の結果——クラークソンの勤勞——フォーエル・バックスーン、其決志と精力——奴隷の廢止　三五七頁——四二四頁

第九章　實務家

ハズリットが實務家の定義——重要なる性能——天才の人、事務の人——シェクスピア、チョーサー、スペンサー、ミルトン、ニュートン、クーパー、チルヴナルス、スロット、リカードー、グロート、ジョン・スチュアート・ミル——成功に必要なる勤勞專心——メルボーン卿の忠言——艱難の學校は良校なり——法律に成功する條件——勤勉なる建築師——勞作の健全なる影響——算術輕蔑の結果——所謂「社會」の不正に關する博士ジョンソンの語——ワシントン・アーヴィングの意見——事務に必要なる實際的性能——正確の重要——チャールス・ジェームス・フォックス——方式——リチャード・セシル及びデ・キット、二人の事務の處理——時の價値——サー・オーター・スコツの忠言——敏速——時の節約——時間の嚴守——堅固——奇慧——實務家としてのナポレオン及びウエリントン——ナポレオン細事に注意す——「ナポレオン書簡集」——ウエリントンの事務的才能——半島戰爭に於けるウエリントン——「正直は最良の政略」——商業は品性を練る——不正の利益——標本的實務家ダヴィッド・ベークレイ　四二五頁——四六七頁

第十章　金錢——其用法と濫用

金錢の正しき使用は智能の試驗となる——克己の德——自ら己に稅を課す——節約は獨立に必要なり——不用意者の薄弱——節儉は重要なる公共問題なり——リチャード・コブデン及びジョン・ブライトの忠言——不用意者の薄弱——勞働者も獨立を獲る

を得―節約の意味―フランシス・ホーナー、父より忠言を受く―ロバート、バーンス―收入以内の生活―ベーコンの格言―浪費者―負債に陷ること―ヘイドンの負債―フィヒテ―博士ジョンソンの負債論―ジョン・ロック―ウエリントン侯爵の負債論―ワシンーン―センー・ホンセンー伯爵、其手形拂はれず―ジョセフ・ヒューム英國生活の程度高きに過くを論ず―優雅たらんとの欲望―ナピアーの印度駐在士官に對する命令―誘惑に抵抗すること―ヒュー・ミラーの事―人生の高き標準は必要なり―金儲勤倫に關する諺―トーマス・ライーと囚人の順化―凡て正直なる勤勉は貴ぶべし―單なる金儲―ジョン・フォスターの記す所―富は著も人の價値の證明たらず―金錢の力過重せらる―ジョセフ・ブラサーン―眞の體面―コリンゲウット卿

四六八頁―五〇六頁

第十一章　自修―容易と困難

サー・ガーター・スコツー及びサー・ヘンジャミン・プロウディーの自修論―博士アーノルトの精神―業務に活動するは健康に益あり―マルサスの其子に對する忠言―身體的健康の重要―ホドソン―博士チャンニング―早年の勤勞―道具使用の練習―偉人の健全―サー・ガーター・スコツー競技を好む―パロウ、ブラー、グラーク―勤勞は万事を征服す―チャツタートンの語―ブアーグソン、ストーン、ドリユー―サー・ジョンユア・レーノルヅの說―方向正しき勤勞―フオーエル・ハックストンの說―博士ロスの說―フランシス・オーナーの說―ロヨラの說―セント・レオナ

ルヅ卿の說―精通、正確、決斷及び敏速―忍耐勤勞の德―智識の詰込み主義及び濫讀の惡影響―知識の眞効能―書籍は學識を供せん、されど能く用ひられし知識經驗のみが智能を啓發す―マグナ・カルタの人々―ブリンドレー、スティブンソン、ハンター等讀書的知識なくして而も偉大なり―エアン・バウル・リヒテル―自重―立身出世の手段としての知識―知識の價値に關する陋想―ベーコン及びサウセーの思想―ドウグラス・ジエロルド滑稽文學を論ず―快樂を過度に好む危險―ベンジャミン・コンスタント、其高き思想と卑き生活―シーリー、其高貴なる品性―コレリツヂとサウセー―ロバート・ニコル、コレリツヂを論ず―チャールス・ジエームス・フオックス堅忍を論ず―智能と力量、失敗に依りて得らる―ハンター、ワット、デーヴキー、ロシニ、メンデルスゾーン、―困難逆運の功能―リンドハースト、デ・アレンベルト、カリシミ、レーノルヅ、及びヘンリー・クレーの固執論―カーラン清貧を論ず―困難との苦鬪、アレキサンダー・マレイ、ウキリアム・チャムバース、コベット、―佛蘭西の石工、教授となる―自修者としてのサー・サミュエル・ロミリー―ジョン・ライデンの堅忍―教授リー、其堅忍及び語學者としての成功―晩年に學問せし人、スペルマン、ブランクリン、ドライデン、スコット、ポツカチオ、アーノルド、其他―愚鈍者にて名を揚げし人、グラント將軍、ストーンオール・ウヤックソン、ジョン・ハワード、デーヴキー、其他―愚鈍者の成功は堅忍に由る話

五〇七頁―五七九頁

第十二章　實例―模範

實例は有力の教師なり——行爲の感化力——兩親の實例——凡ての行爲は其結果の連續を有す——ダスレイリー、コブデンを論ず——バッベージの語——人間の責任——各人善實例を他人に負ふ——語らずして爲す——チゾーム夫人——博士クスリーとジョン・バウンダー、行爲の善き模範——優者との交際——交際に關するフランシス・ホーナーの意見——ランスダウン侯爵とマルシャーブ——フォーエル・バックストンとガーネー家——ジョン・スターリングの一身の感化力——藝術的天才の他に及ぼす感化力——勇者の實例は臆病者を鼓舞す——傳記は高き品性を造るために貴し——傳記にて鼓舞せられし人々——ロミリー、フランクリン、ドリュー、アルフィーリ、ロヨラ、ウォルフ、ホーナー、レーノルダ——快活の實例——博士アーノルドの感化力——サー・ジョン、ジンクレアーの經歷　五八〇頁——六一五頁

第十三章　品性——眞正の紳士

品性は人の最良なる所有物なり——フランシス・ホーナーの品性——フランクリン——品性は力なり——品性の高き性能——エルスキン卿の行爲の規則——人生の高き標準必要なり——眞實——ウエリントン・ピールの品性を論ず——君が見える如くあれ——行爲の純潔誠直——習慣の重要——習慣は品性を造る——青年に於ける習慣の發達——ブライトンのロバートソンの語——擧動及び德行——禮讓及び深切——アバーネシーの逸話——眞正の鄭重——大心情は富貴高位の人に限られず——ウキリアム・ケラント、及びアヤールス・ケラント、「チエーリブル兄弟」——眞正の紳士——エドワード・フィッチ

ゲルド卿——名節、忠信、誠直——紳士は賄賂を受けず——ハンウエー、ウエリントン、ウエレスレイ及びサー・シー・ナピアーの逸事——財布に於て貧なるも精神に於て富むを得——高貴なる農夫——デイール舟子の勇敢——奴地利の皇帝及び二人の英國勞働者の逸事——眞理は紳士の成功をなす——勇氣と溫厚——印度に於ける紳士——アウトラム、ヘンリー・ローレンス——クライド卿——アクラの兵卒——バークケンヘッド號の難破——權力の用ひ方は紳士の試驗なり——サー・ラルフ・アバークロンビイ——フラーの記せしサー・フランシス・ドレークの品性　六一六頁——六五八頁